

神野の土井昭雄家所蔵の 板碑調査の報告

2020年7月18日 八千代市郷土歴史研究会 例会

蕨由美

板碑発見と調査のきっかけ

2020年2月22日の神野地区のフィールドワークで土井昭雄家に立ち寄り、同家敷地内保管の多量の中世板碑群を見せていただきました。

これらは、未報告の板碑群であったことから、当会での調査となった次第です。





「板碑」とは (1)

「板碑」とは、板状の石材に仏像を表す種子（しゅじ）や被供養者名や年月日を刻んだ石塔で、鎌倉時代から室町時代の仏教の供養塔です。

今回調査したのはすべて「武蔵型板碑」で、秩父産の緑泥片岩を使用し、頭部が三角で二条線を刻み、薄く長細い形をした関東に多い板碑です。

「武蔵型板碑」の例



千葉市文化財 真蔵院の「武石の板碑」

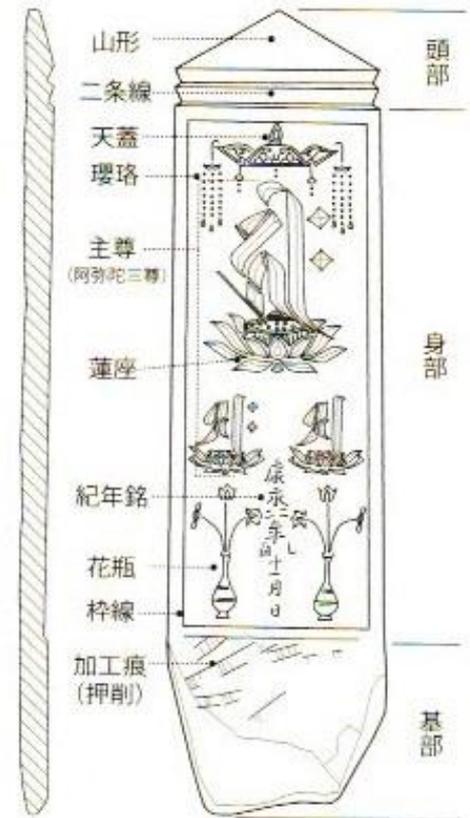


図 板碑の形態と名称



八千代市では、米本の「長福寺の板碑一括」が文化財に指定されています。（有刻19基・無刻5基・断片数枚）

また 神野では、これまで小名木淳家の康永三年銘ほか13基、土井秀雄家墓地の延文銘ほか10基、福田広家の2基の武蔵型板碑（種子は全てキリーク）が報告されています。

八千代市文化財「長福寺の板碑一括」

「板碑」とは (2)

「下総型板碑」の例

八千代市文化財

「神野の下総式板碑」

玉蔵院（神野公会堂）

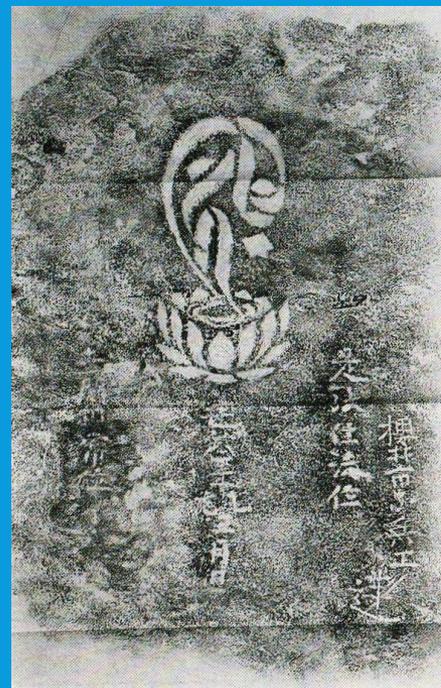


胎蔵界大日如来（アーク）の種子。
その下部には100名以上の戒名が見
られます。
造立の年号は残っていませんが、南
北朝期と推定されます



「下総型板碑」の多くは、香取市や成田市、
印西市などに多く分布しています。

筑波石（黒雲母片岩）製で、古墳石材の
再利用が推定されています。



八千代市逆井の下総型板碑の拓本

2020年6月27日 板碑調査の様子と作業の流れ

当会の村田一男顧問の呼びかけで、10時に8名に会員が集まり、土井昭雄氏のご厚意で、同家所蔵の板碑群の調査を行いました。

午前中は、納屋と庭先をお借りして、保管場所から運び込んだ板碑を洗い、村田顧問の指導で、分類と計数を行い、午後からは1点ずつ、計測と梵字・装飾・銘文をカードに記入、拓本採りと写真撮影を行い、午後3時過ぎに終わりました。



1.保管場所から運び込んだ板碑を丁寧に洗いました。



2.分類と計数を行いました。

No.1~12 有刻完形板碑 (12点)
No.13~31 有刻上部断碑 (19点)
No.32~43 無刻上部断碑 (12点)
No.44~54 無刻完形板碑 (11点)
No.55~86 無刻下部断碑 (32点)
No.87~121 無刻断片 (35点)
総計 板碑121点 & 五輪塔空風部1点



3.計測と梵字・装飾・銘文をカードに記入、拓本採りと写真撮影を行いました。





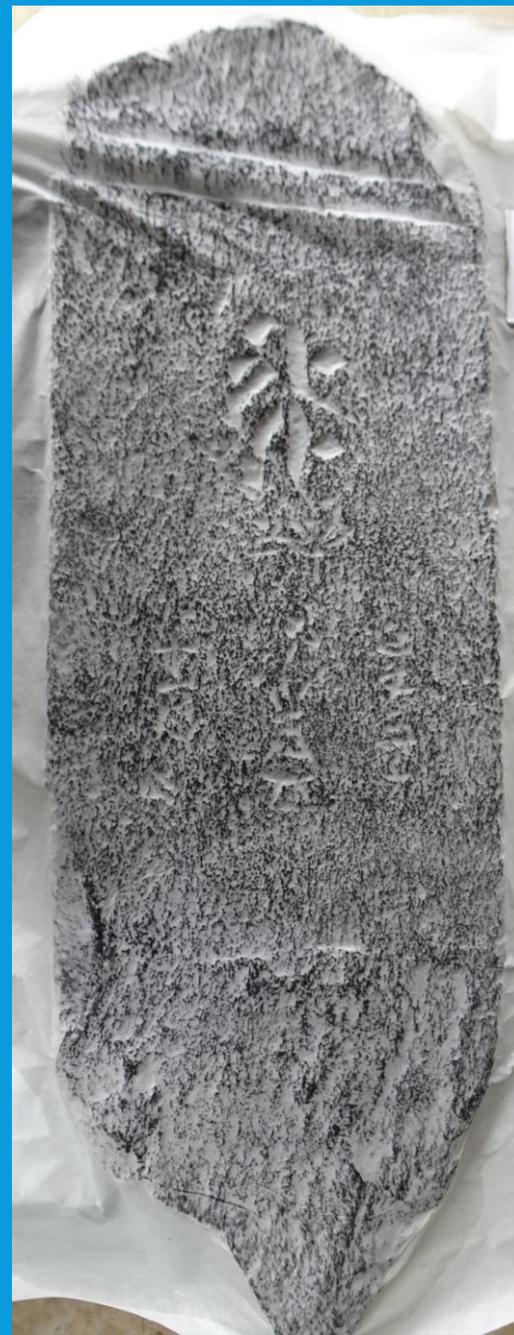
調査した板碑群

No.1~12 有刻完形板碑 (12点)

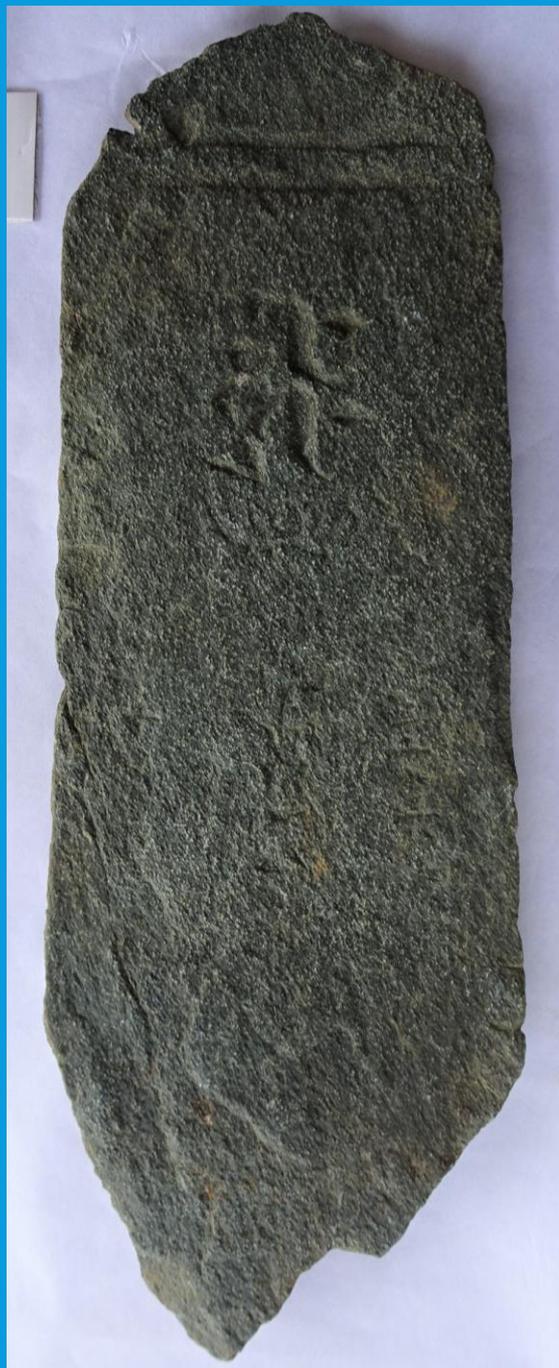
No.13~31 有刻上部断碑 (19点)



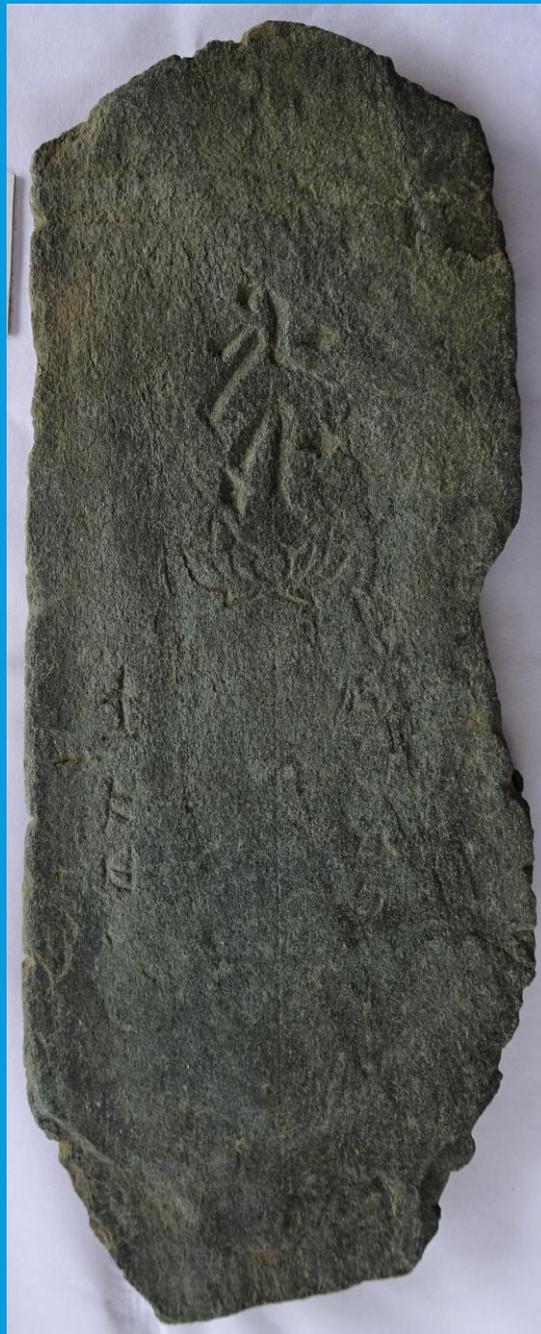
No.1 (1358)
「延文三年／
十一月 日」銘
二条線
キリーク・蓮座
花瓶



No.2 (1357)
「延文二年／
十月 日」銘
二条線
キリーク・蓮座
花瓶

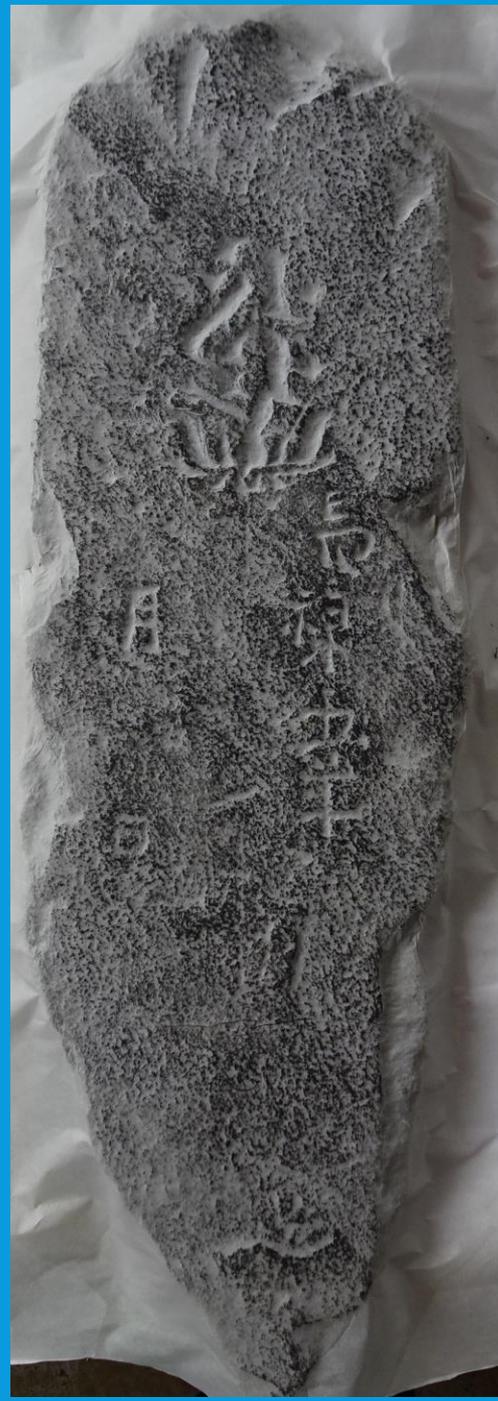
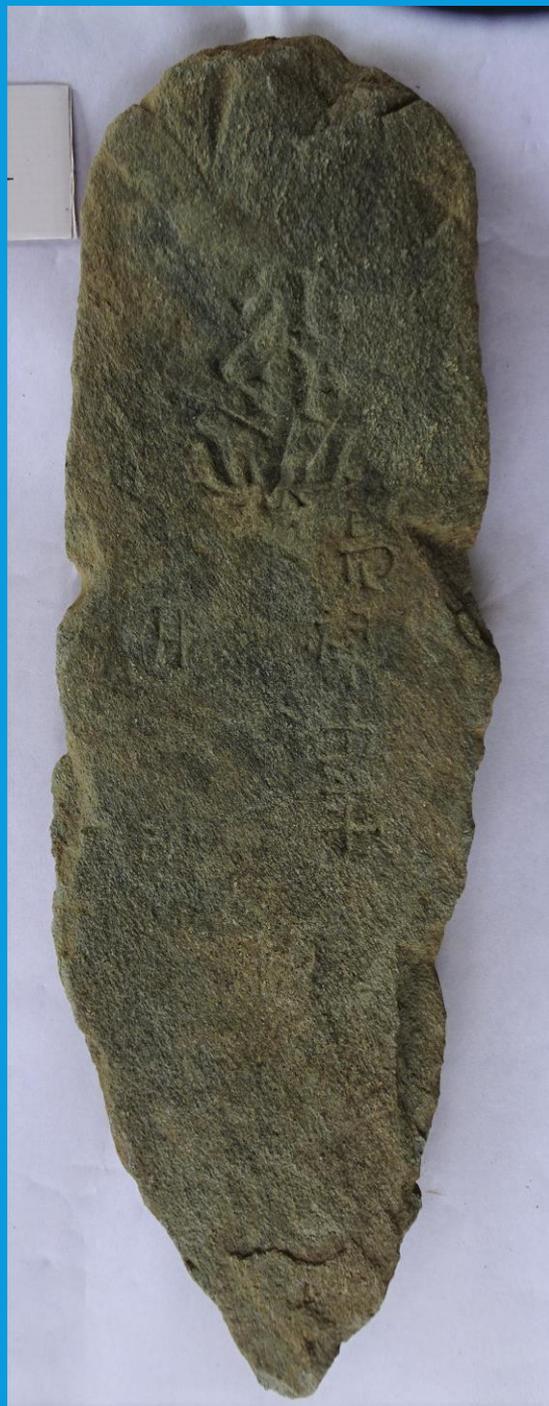


No.3 (1360)
「延文五年／
十一月日」銘
二条線
キリーク・蓮座



No.4 (1461)

「長禄五年／
月 日」銘
キリーク・蓮座



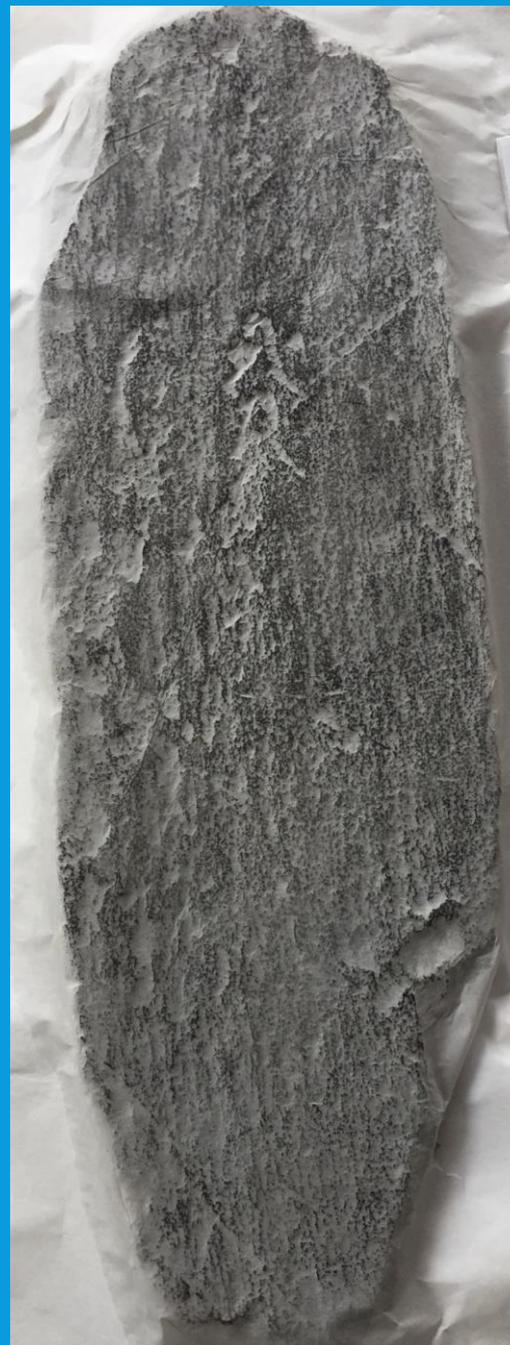
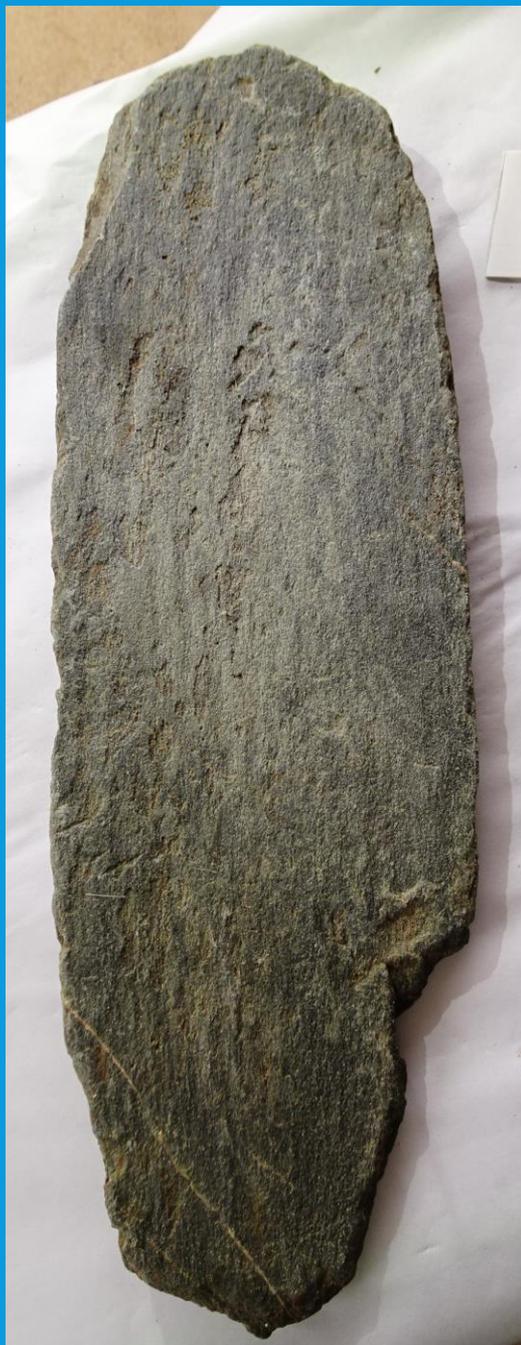
No.5 (1466)
「寛正六年」銘
キリーク・蓮座



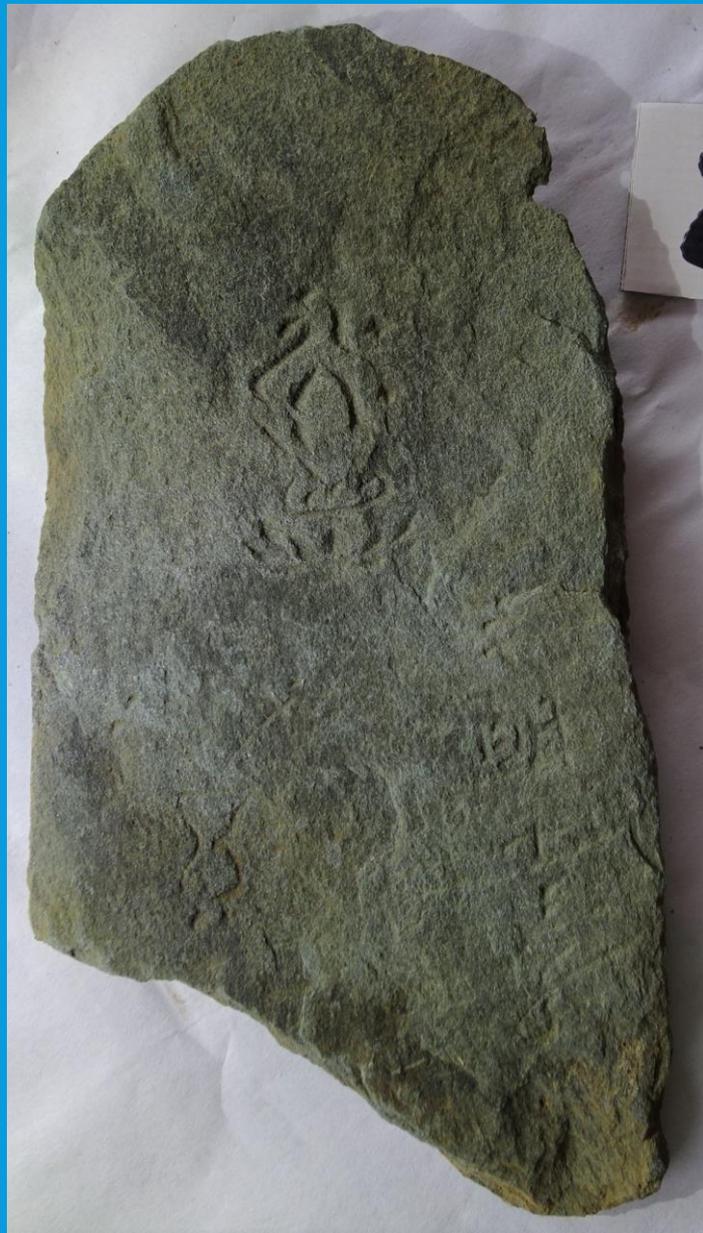
No.6 (1477)
「文明九年」銘
キリーク・蓮座



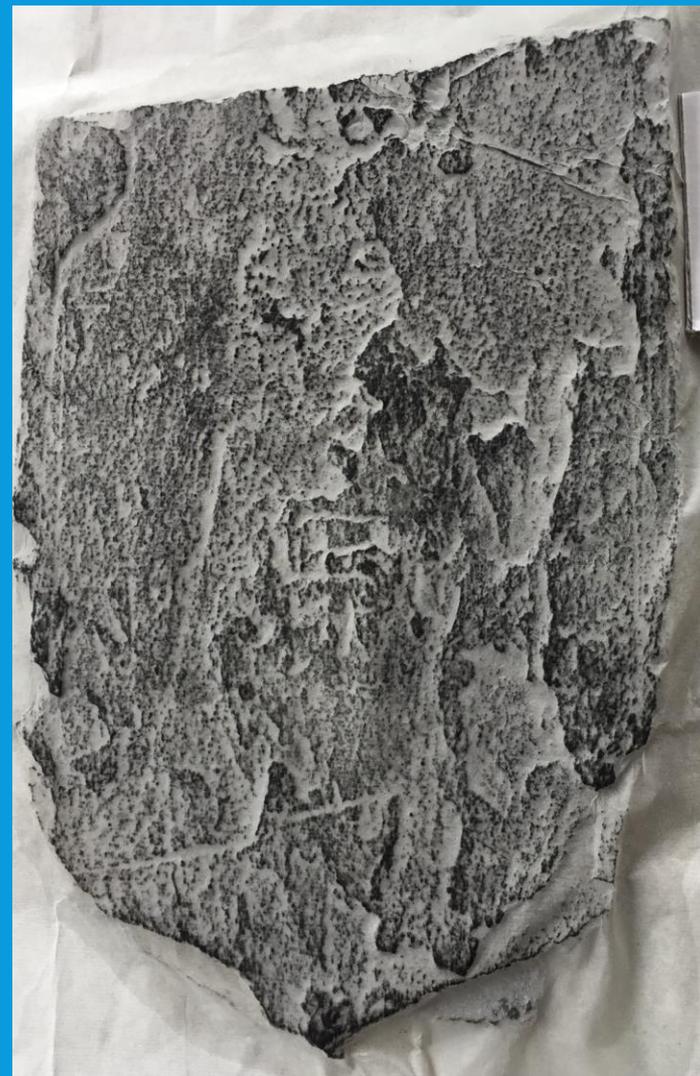
No.7
キリーク



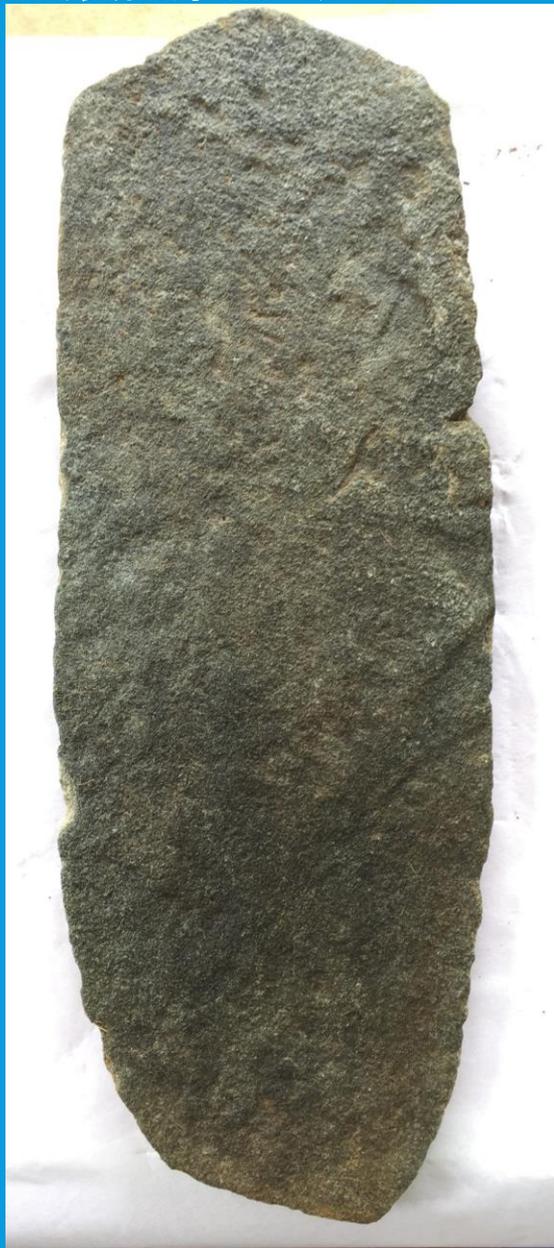
No.8 (1478)
「文明十年」銘
キリーク・蓮座
花瓶



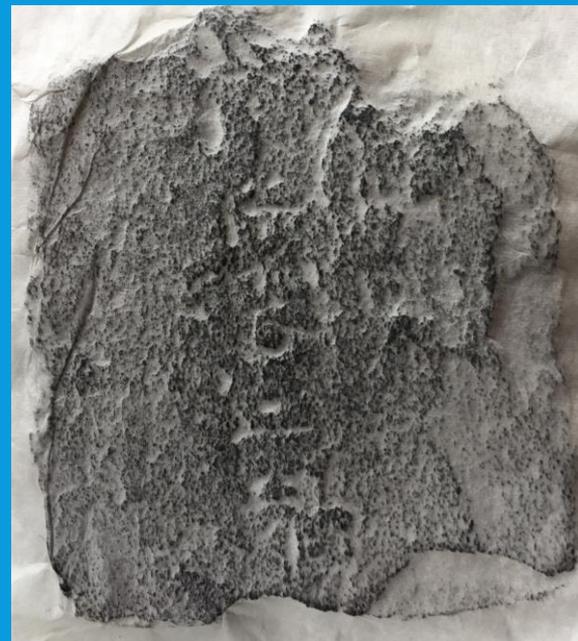
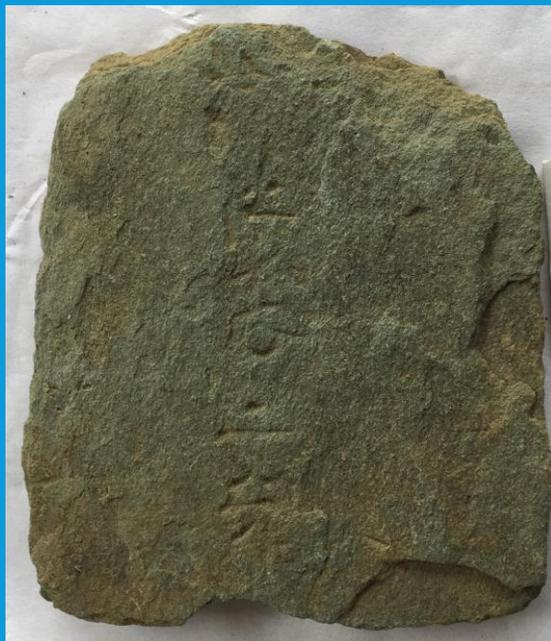
No.9 (1467)
文正二年」銘
蓮座



No.12 有刻 完形板碑
(表面摩滅?)



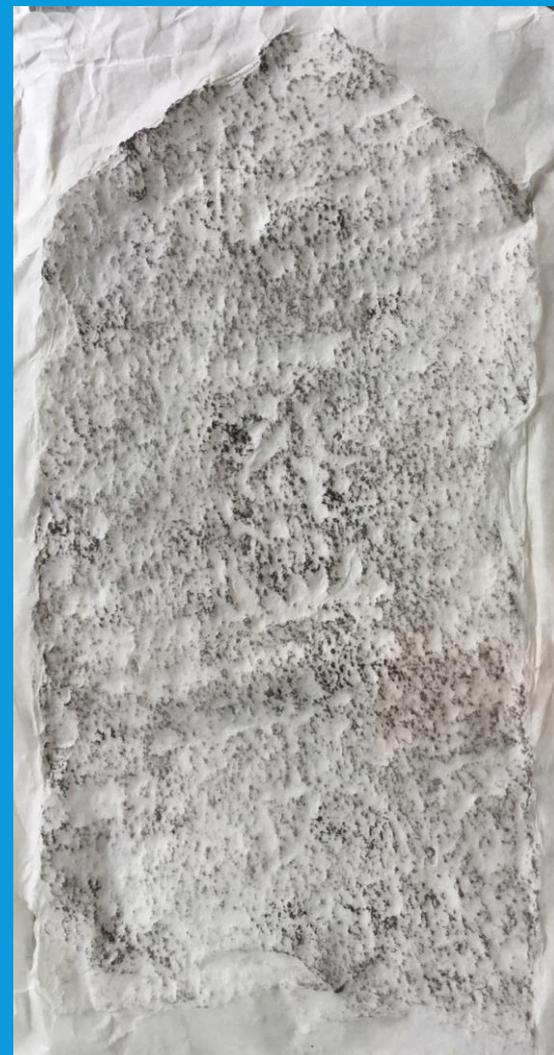
No.13 有刻上部断碑
(1467)
「文正二年」銘



No.14・15 有刻上部断碑

No.15
キリーク・蓮座
花瓶

No.14
二条線
キリーク・蓮座



No.16



No.17



No.18



No.19



No.20



No.21



No.16~20 有刻上部断碑
キリーク
弧線状の略式の蓮座

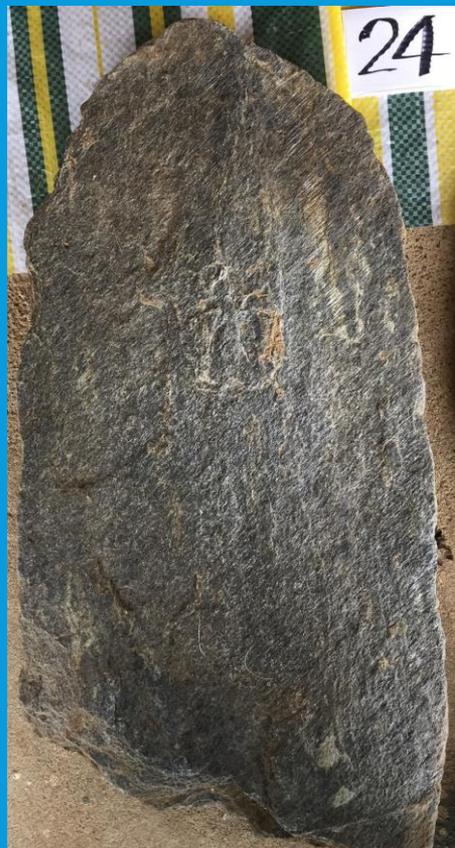
No.22



No.23



No.24



No.25



No.22～25 有刻上部断碑
キリーク

No.23・24
弧線状の略式蓮座

No26～28 有刻（キリークの痕跡） 上部断碑

No.26



No.27



No.28



No.29~32 有刻（不明）上部断碑

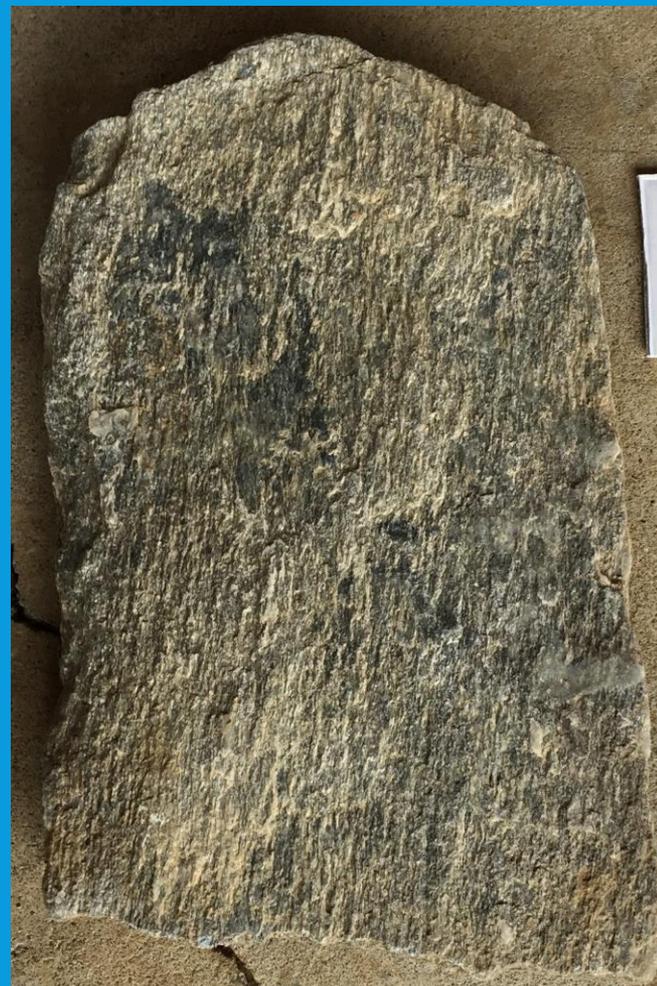
No.29



No.31



No.32



No.30



No.32~43 無刻上部断碑



No.33~38 無刻 上部 断碑

No.33



No.34



No.35



No.37



No.36



No.38



No.39~43 無刻上部断碑

No.39



No.40



No.41



No.42



No.43



No.44~47 無刻完形板碑



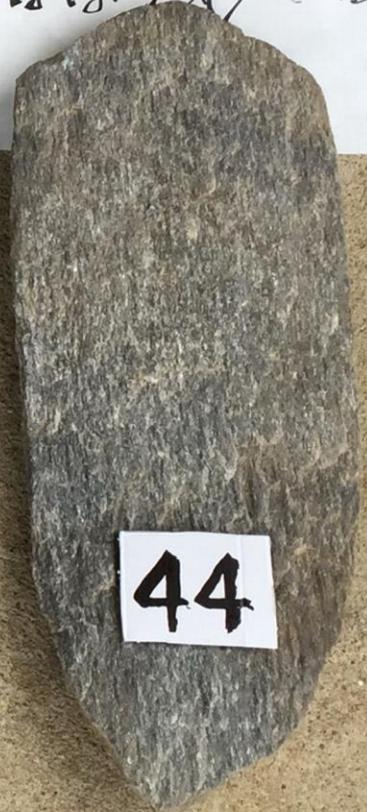
47



46



45



44

NO.44 ~ ~~50~~54
ほぼ完形 (11基)

No.46～49 無刻 完形板碑



No.50～54 無刻 完形板碑



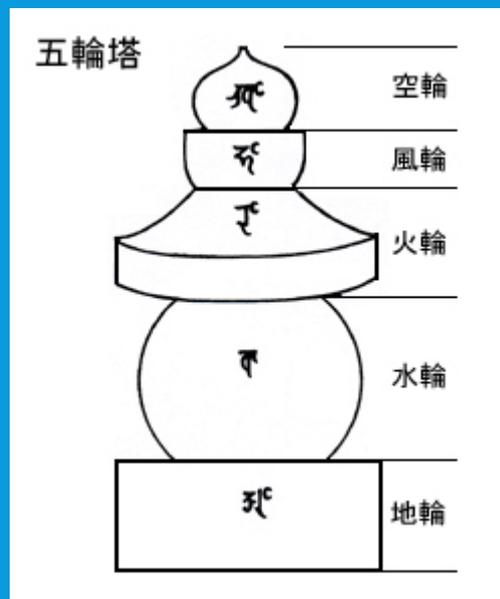
No.55~86 無刻下部断碑



No.87~121 無刻断片



No.201 五輪塔の空風部分



まとめ

今回調査した武蔵型板碑の総数は121点、うち無刻で上下不明の断片35点を除くと、基数は86基以内と推定され、ほかに小型の五輪塔の空風部分がありました。

種字はすべて阿弥陀如来を表す「キリーク」一尊で、蓮座を伴い、中には花瓶の表現が残っているものもありましたが、被供養者名の銘はありませんでした。

年銘のあるのは9基で、北朝年号の延文二・三・五年（1357～60）、長祿五年（1461）と寛正六年（1466）が各1基、文正二年（1467）が2基、文明九・十年（1477～78）が各1基でした。

千葉県武蔵型板碑の年銘のピークは14世紀中葉と15世紀後葉にあり、今回の調査例も同じ傾向でした。

また「長祿五年」銘碑は、月日の数字がなく、同4年12月に寛正に改元されていることから、半製品と思われます。

その他、キリーク一尊と弧状線の略式蓮座のみの粗雑なもの十数基、また完形でありながら、無刻で粗雑な小型の板碑が11基ありました。このような無刻の板碑は、印西市の吉田天神前遺跡出土の板碑群でも多く見られ、本間岳史氏は「粗雑にみえるがあくまでも製品であり、板碑として造立されたもの」と推定されています。

（「印西の中世板碑をさぐる」『印西の歴史』第12号2020・3）

これらの既報告例に合わせ、今回の調査結果と分析によって、神野の中世の信仰の姿と時代背景がより詳しく見えてくることが期待されます。

ご清聴ありがとうございました